貝塚市文化財調査概要　1978

貝塚市遺跡群発掘調査概要 Ⅰ

1979・3

貝塚市教育委員会

はしがき

貝塚市は、古い歴史と伝統にはぐくまれた貴重な文化遺産を今日に伝えている町として知られています。なかでも、祖先の人々の血と汗の生活の記録である埋蔵文化財が、全市域に散在しています。

特に、中世には、神前千軒と呼ばれる集落があったと伝承される加治・神前・畠中遺跡からは、奈良時代の住居跡や平安時代の土器が出土し、奈良時代から平安時代にわたる集落の一端が発見されました。

この調査報告書は、昭和53年度中に市内の埋蔵文化財包蔵地において実施した貝塚市遺跡群発掘調査のまとめであります。

最近各地で開発か、文化財保護かと論議を呼んでいるところでありますが、この報告書は市民の皆様方のご理解を得まして、文化財の保護についてより一層認識を深めていただくための一助となれば幸に存じます。

貝塚市教育委員会
教育長　亀岡久夫

例　　言

1. 本書は、貝塚市教育委員会が、国庫補助事業（総額3,000,000円、国補助率50％、府補助率25％、市負担率25％）として計画し、社会教育課が担当実施した、貝塚市遺跡群発掘調査記録である。

2. 調査は、貝塚市教育委員会、吉川和則を担当者とし、昭和53年4月13日に着手し、昭和54年3月31日に終了した。

3. 調査の実施と整理にあたっては、久保泰浩、森茂、藤木隆、文野達也、藤本智子、井阪恵子、上西弘美諸氏の協力があった。また、石神怡、広瀬和雄、灰掛薫、神谷正弘の諸氏からも有益な助言を得た他、土地所有者の溝端ミツエ、佃七雄氏からも多大な協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

4. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望したい。

目　　次

第１章　位置と環境 ---------- 1
第２章　調査にいたる経過 ---------- 2
第３章　調査概要 ---------- 3
○新井・鳥羽遺跡 ---------- 3
1. 層位
2. 遺構
3. 遺物
4. おわりに
○加治・神前・畠中遺跡 ---------- 6
1. 層位
2. 遺構
3. 遺物
4. おわりに

挿図目次

1. 新井・鳥羽遺跡位置図 ---------- 3
2. 新井・鳥羽遺跡断面実測図 ------ 4
3. 加治・神前・畠中遺跡位置図------ 7
4. 加治・神前・畠中遺跡断面実測図-- 8
5. 加治・神前・畠中遺跡遺構実測図-- 9
6. 加治・神前・畠中遺跡遺構実測図--11

図版目次

第１　遺跡周辺航空写真
第２　新井・鳥羽遺跡遠景・遺構写真
第３　新井・鳥羽遺跡遺構写真、遺物出土状況写真
第４　加治・神前・畠中遺跡遠景遺構写真
第５　加治・神前・畠中遺跡遺構写真
第６　加治・神前・畠中遺跡遺構写真、遺物出土状況写真
第７　新井・鳥羽遺跡遺物写真
第８　新井・鳥羽遺跡遺物写真
第９　加治・神前・畠中遺跡遺物写真
第10　加治・神前・畠中遺跡遺物写真
第11　遺跡分布図
第12　調査地位置図
第13　新井・鳥羽遺跡遺構実測図
第14　加治・神前・畠中遺跡遺構実測図（第１遺構面）
第15　加治・神前・畠中遺跡遺構実測図（第２遺構面）
第16　新井・鳥羽遺跡遺物実測図
第17　新井・鳥羽遺跡遺物実測図
第18　加治・神前・畠中遺跡遺物実測図

貝塚市遺跡群発掘調査概要

第１章　位置と環境

貝塚市は、大阪府の南部、大阪市と和歌山市のほぼ中間に位置し、東西14.3㎞、南北4.8㎞の細長い行政区域である。その北西は大阪湾を隔てて、六甲山系、淡路島を望見し、南は和泉山脈をへて和歌山県との境となる。この山脈より流れでる津田川・近木川・見出川の3河川は平野部を横断し、大阪湾に注いでいる。

山地は主に和泉砂岩からなり、急な傾斜地にやや深く谷が刻まれている。蕎原・大川・秬谷の集落はこの谷の出口に発達した山間の小盆地でほぼ東西にならび、その高さは200m内外で、これから下にも200～300mの丘陵地がある。丘陵地は2つに分けられ、1つは蕎原、大川、秬谷から北へ木積・馬場あたりまで連なる丘陵性山地で、主として花崗岩層からなっている。もう一つは木積盆地以北の小高い丘陵地である。これは洪積層と呼ばれ、砂、礫、粘土等から出来ており、みかんの栽培地となっているところもある。

平地は洪積層と沖積層に分かれ、洪積層は近木川、津田川、見出川により深く刻まれ、川底との間は5～10m位の断崖になっている所が多い。この洪積層の突端に寺内町、願泉寺が建てられ、国道26号線はその崖下に沿って海岸に併行して通じている。又、この洪積平地は用水が十分に得られないから、奈良、播磨、讃岐平野等と共に用水池の最も発達した地帯であり、数多くの溜池を平地や丘陵地に設けて、潅漑用に供している。

次に、一段低い平地は沖積層と呼ばれる最も新しい土地である。海岸線は約4㎞あり、白砂青松の景勝地とうたわれ、大阪で名残りをとどめる数少ない海浜の1つとして海水浴場としても貴重な存在である二色ノ浜がある。しかし附近に工場が建ち並び、環境整備計画の実施と共に様相が変化しようとしている。

第２章　調査にいたる経過

市域には、現在５６の埋蔵文化財包蔵地が周知されている。これらを種別してみると、城跡10、寺院跡８、古墳・古墓７、窯跡３、散布地27、その他２となり、その多くは遺物散布地としてしか確認されておらない。又、その出土遺物も個人・団体等の保管としてあちこちにちらばっており、十分確認できえていないのが現状である。又、散布地以外も古図等により確認されておるだけで、実際に遺構、遺物等が確認できているのは極限られたものだけである。

しかし、このように各遺跡の性格、範囲等把握できていないなかで、近年遺跡及びその周辺地域での住宅を中心とした小規模開発が相ついできた。そこで昭和51年秋以来、府教委の指導により埋蔵文化財包蔵地及び周辺地域における土木工事等による発掘に対する確認調査を行ってきた。昭和53年度中にはその「土木工事等による発掘届」は、約70件も提出されている。

そこで今年度より国及び府の補助をうけて、市内遺跡の緊急発掘調査を実施する運びとなった。市域の各遺跡は上述したように範囲性格等まだまだ不明確であり、範囲確認調査の意味あいももつものである。

以下概要を報告するのは、新井・鳥羽遺跡、加治・神前・畠中遺跡での調査である。共に住宅建設に伴う緊急調査である。

新井・鳥羽遺跡の周辺には、東から南にかけて、奈良時代の秦寺跡、奈良時代の海岸寺山墳墓遺跡、古墳時代の海岸寺山古墳、海岸寺山須恵器窯跡、南須恵器窯跡群、弥生～古墳時代の半田遺跡、弥生時代の新井ノ池遺跡、室町時代の墓地、橋本遺跡等がみられ、北は津田川となる。今回の調査ではこれらの遺跡の中では比較的新しい時代の遺跡である。

又、加治・神前・畠中遺跡は、近木川下流右岸の低位段丘上に位置する広大な面積を有する遺跡であり、平安時代の瓦を出土した長楽寺跡、奈良時代の瓦を出土したといわれている加治・神前遺跡があり、平安時代の瓦を出土している近義堂廃寺といわれるところもある。

第3章　調　査　概　要

1．　新井・鳥羽遺跡（第1調査地）

市内東北部の低位段丘上に位置する新井・鳥羽遺跡は、無土器～室町時代の遺物散布地として文化財地名表①に記載されている。字新井の村を除けば、多くは水田の下に眠っているが、国鉄東貝塚駅、第2阪和国道に近いこともあり、近年小規模の建売住宅が次々と建ち並び　日々様相を変化しつつある。

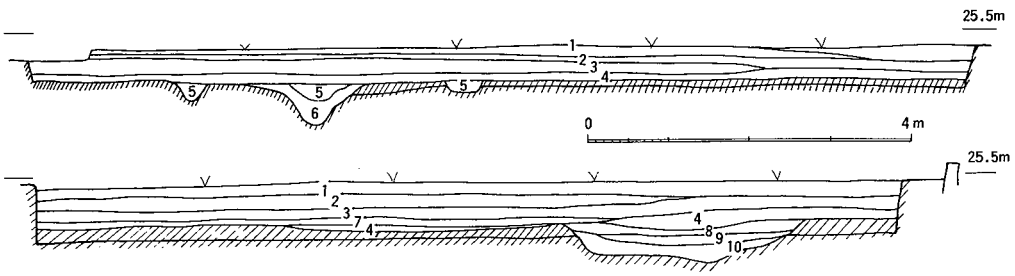
今回の調査地は、遺跡の東部で海塚大池のすぐ東、新井字堂ノ前と呼ばれるところである。調査面積は約140㎡である。

註①　大阪府教育委員会「大阪府文化財地名表」　1978

挿図1　位置図

1. 層　位

上から第1層が暗灰色土（耕土）、第2層が茶黄色土（床土）、第3層が灰黄色土、第4層が灰褐色土で、地表から約50㎝の厚さを測る。第4層からは、瓦器（椀）、土師質土器（甕、土釜、小皿）、須恵質土器（練鉢）、瓦質土器（土釜）、瓦等中世遺物が出土している。地山は茶黄色粘質土で、遺構はこの上面で検出された。地山面の標高は24.9 m前後である。



1　耕土　　5　灰褐色土　　9　灰褐色粘質土
2　床土　　6　灰色土　　10　黄色粘土混り灰色粘土
3　灰黄色土　7　黄灰褐色土
4　灰褐色土　8　灰褐色砂質土

挿図2　断面実測図

2. 遺　構

検出された遺構は、井戸2基、溝3条、土坑1個、ピット30余個、落ち込み2ケ所である。以下簡単に説明を加える。

井戸－1　2 m×2.5 mの楕円形の掘り方を呈し、深さ2.3 mを測る。埋土中層（灰褐色土）より瓦質の土釜が、下層（青灰色粘土）より、土師質土釜、土師質練鉢、瓦、木片等が出土した。

井戸－2　井戸－1を切り掘られた井戸で南に位置する。2 m×1.6 mの円形の掘り方を呈し、深さは1.5 mを測る。埋土上層（黄褐色粘質土）より瓦器埦（完形）が、下層（青灰色粘土）より、瓦器埦（完形、高台付），土師質土釜、須恵質練鉢が出土した。

溝－1　北西－南東方向の幅70㎝、深さ40㎝、長さ14 mのU字型を呈す。溝内からは瓦器が出土した。井戸－1、溝－2に切られる。

溝－2　北東－南西方向の幅50～70㎝、深さ10㎝、長さ16ｍの浅い溝で瓦器、瓦等出土した。

溝－3　幅40㎝、深さ10㎝、長さ2.1ｍの溝－1と平行する小溝である。

土坑　直径2ｍ、深さ10㎝余の浅い隅丸方形を呈し、灰褐色土を埋土とする。土師質甕、土釜、小皿、土錘等が出土した。

落ち込み1　調査域東南隅でトレンチ上に検出された落ち込みで、0.5ｍ×3.3ｍ、深さ50㎝の掘り方を呈する。瓦質、土師質土釜が出土した。

落ち込み2　幅3ｍ、長さ6ｍ、深さ50㎝を測り、一見溝状を呈する。下層（灰色粘土）より、土師質土釜、甕、瓦が、煤の付着した河原石と共に、割合まとまった状態で出土した。

ピット　直径20～30㎝、深さ10～20㎝の円形の掘り方のものが多く、根石の残るものもみられたが、相互における関連はつかめえなかった。

3.　遺　物

今回の調査において出土した遺物は、収納箱約6箱であり、ほとんどが土器、瓦で、小片が多い。多くの遺物は南北朝時代から室町時代にかけてのものである。以下総括的に説明を加えておく。

瓦器　口径13㎝、高さ3.5㎝で、方形の機能をはたさない貼り付け高台がつき、内面には渦巻状の暗文がみられる焼成良好な椀と、高台をもたない、口径14㎝前後、高さ3㎝前後のやや薄手の外面下半に指の圧痕をのこすものと、少し調整を加えているものとがみられる。

土釜　瓦質の羽釜は、口径23㎝、現高3㎝のやや内傾する口縁に端部を平担に仕上げるものと、口径30㎝、現高5㎝、の内傾する口縁端部を外へ折り曲げたものとがみられる。土師質の羽釜は、口径20、25、30㎝位の大きさのものがみられ、内傾する口線は端部で少し外へ折り曲げている。

甕　口径28㎝のくの字形に大きく外反する口縁部に端部は内外に肥厚し平担となり肩部に断面三角形の貼り付け突帯がみられる。外面には全面に煤が付着

している。

練鉢　須恵、土師質共に1点づつ片口の鉢とみられるものがある。

その他　連珠文軒平瓦、蓮華文軒丸瓦、平瓦、熨斗瓦、丸瓦等の少し時代幅のある瓦類のほか、土錘、土師質小皿等も出土している。

4　おわりに

新井・鳥羽遺跡は、東西300 m、南北500 mにおよぶ無土器～室町時代の遺跡である。これまでの分布調査や今池周辺の試掘調査により若干の遺物が採集出土している。今回の調査により、南北朝～室町時代にかけての遺構を検出した。

2基の井戸は元々直径2 m、深さ1.5 m、2.3 mの円形の掘り方を呈し、互いに切りあっており、14世紀頃に比定される瓦器椀・羽釜・甕・錬鉢・瓦等が出土している。溝2の北、落ち込み2からも、下層より羽釜・瓦・甕等が煤の付着した河原石と共に多く出土している。又、このように10点余ではあるが、瓦が出土しており、調査地「堂ノ前」の近くには「薬師」という小字名も残り「貝塚願泉寺本末寺院明細帳」には中世末期に尊光寺が新井から移ったと記載されており、正福寺も新井から移ったとされている。

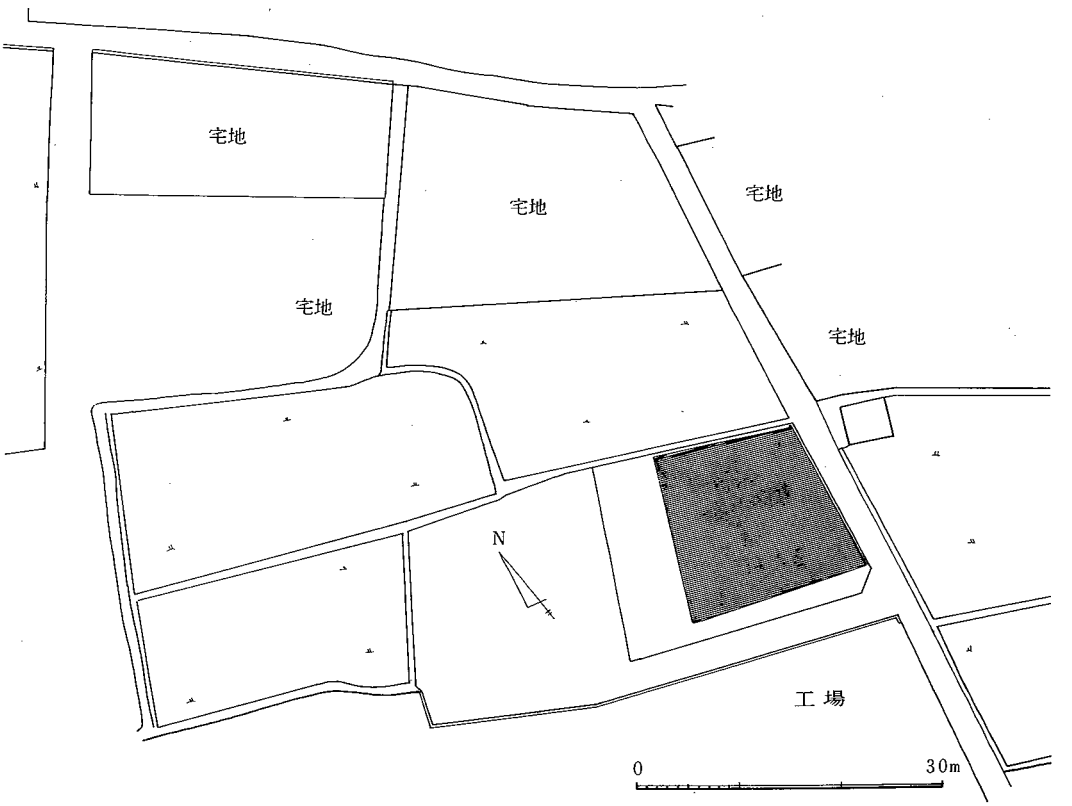
2．加治・神前・畠中遺跡（第2調査地）

近木川下流の右岸から南海貝塚駅付近にかけて広がる1.4Km×1.1Kmの縄文～室町時代の複合遺跡である。数年前より遺跡を縦断する貝塚中央線予定地内において調査[①]が行われ、平安時代の建物跡等が検出されている。又、この計画道路が実施されれば、水田下に眠っている遺跡はたちまちのうちに宅地となり破壊も生じてくる恐れもある。今回の調査地は、遺跡の南端にあたり近木川右

岸の河岸段丘上にあり、畠中字川ノ上と呼ばれているところである。調査面積は約200㎡である。

①大阪文化財センター「貝塚中央線予定地内試掘調査」 1976

大阪府教育委員会による1978年の調査、広瀬和雄氏より御教示

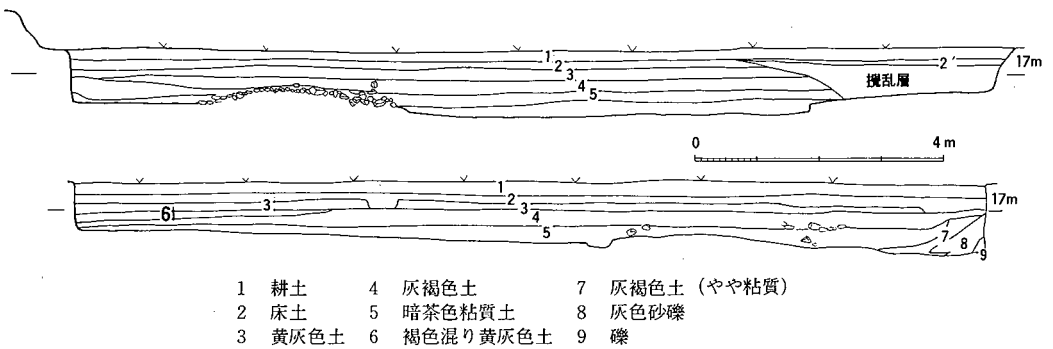


挿図3　位置図

1. 層　位

調査区の基本的な土層は、第1層が暗灰色土（耕土）、第2層が茶灰色土（床土）、第3層が黄灰色土、第4層が灰褐色土、第5層が暗茶色粘質土である。第4層及び第5層は所謂包含層で、第4層からは須恵器（坏・甕・長頸壺・瓶・タコ壺等）、土師器（甕・坏・皿・椀等）、黒色土器（椀・坏）、に混じり瓦器椀、瓦質土器といった中世遺物も出土している。又、第5層からは、須恵

器（坏・甕・タコ壺）、土師器（高坏、坏・甕）が出土している。時期的には第4層が平安時代、第5層が奈良時代のものが多い。遺構は第5層及び第6層上面で検出され、地山面の標高は第1遺構面で16.6 m前後、第2遺構面では、16.4 m前後である。



1　耕土　　4　灰褐色土　　7　灰褐色土（やや粘質）
2　床土　　5　暗茶色粘質土　　8　灰色砂礫
3　黄灰色土　6　褐色混り黄灰色土　9　礫

挿図4　断面実測図

2. 遺　構

今回の調査により検出された遺構は、第1遺構面で、土坑1個、ピット10個が、第2遺構面からは、ピット21個（内、掘立柱建物1棟）、溝3条が検出された。

第1遺構面

調査域北部に幅3 m、長さ13 mの東西方向に礫がレンズ状に隆起しているところがあり、それより北側においては遺構は検出できなかった。

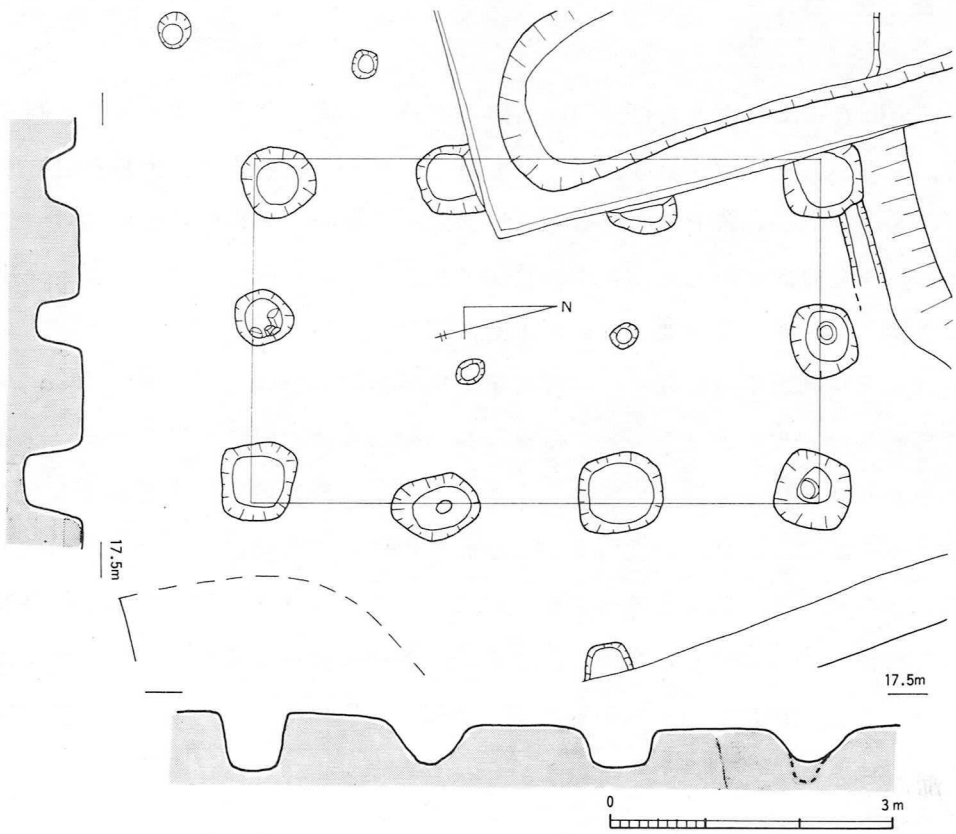
土坑　調査域ほぼ中央においてレンズ状の礫層が低くなるあたりより南側に2 m×5.5 mの楕円形状の遺構である。上層には炭が混じり、完形に近い土師器（坏・碗・皿）、黒色土器（碗・坏）が、須恵器（甕・タコ壺）、緑釉陶器鉄器と共に約150点出土した。遺物の多くは、北側の肩口を始め、石にとまったように幾重なりかになった状態で出土した。下層（灰色砂）にも完形の土器がみられたが、上層に比べ少なく細片が多かった。土坑の掘り方は深さ10～15 cmである。

ピット　調査域南部で検出したピットは、多くは直径20～30㎝の円形を呈し、深さ10～20㎝のものである。埋土内より、須恵器、土師器の細片が出土した。相互における関連はつかめえなかった。

第2遺構面

第1遺構面の調査時に、東部及び西部において、トレンチ調査を行ったおり方形のピット及び溝を検出した。第1遺構面の調査を終えると東部で検出したピットは並びそうであったので、あえて2次遺構面の調査を行った。

建物　3間（6ｍ）×2間（3.6ｍ）の南北棟建物である。柱間は桁行2ｍ、梁行1.8ｍで、掘方は一辺50～100㎝前後の不整形な方形である。柱穴は20㎝前後である。掘方の埋土は灰褐色粘質土で、須恵器、土師器等が少量出土している。建物面積は21.6㎡である。



挿図5　遺構実測図

その他のピット　建物と考えられるもの以外にも8個のピットが検出されたが、2m間隔で並ぶものがみられるが、相互の関連はつかみえなかった。

溝1　幅40～60cm、深さ4cmで、礫層に平行して調査域を東西方向に走る溝である。埋土上から軒丸瓦が出土しており、溝内からも少量の細片土器がみられた。

溝2　幅50～60cm、深さ5cm、長さ7mで調査域南西隅において検出された。南端では溝3と合流する。溝内からは、須恵器（坏・蓋）、土師器（壺）等が出土している。

溝3　幅50cm、深さ10cm、長さ1.5mを測る。溝内からは少量の土器が出土している。

3. 遺　物

今回の調査により出土した遺物は遺物収納箱15箱である。サヌカイト剝片鉄器、瓦等、若干の遺物以外はすべて土器であり、その多くは、土坑と包含層からのものである。若干の中世遺物を除けば、奈良～平安時代にかけてのものである。現在整理中のため、若干の説明にとどめておく。

須恵器　坏・蓋・瓶・甕・壺等が出土している。

蓋は、天井部が平らに近く、口縁端部でほぼ垂直に屈曲し、つまみは擬宝珠様であるもの（ピット出土）と、口縁部が内傾した後、内弯し外下方に下り端部にいたり、内面端部近くに鋭いかえりを有し、宝珠様のつまみを有するものとがある（溝2）。坏は、立ちあがりは短く内傾して端部にいたり、受部は外上方へのびたのち、更に上方へのびているもの（溝2）と、平らな底部に外傾する口縁部のつくもの（包含層）、さらに底部外面に篦切りののちにナデて仕上げ、貼り付け高台のつくものもある（表採）。瓶は体部外面にロクロ目が底部外面には糸切りの痕跡が明瞭に認められるもの（表採）等がある。

土師器

包含層からの出土遺物として、口径16～18cm、器高4～5cmの坏がある。

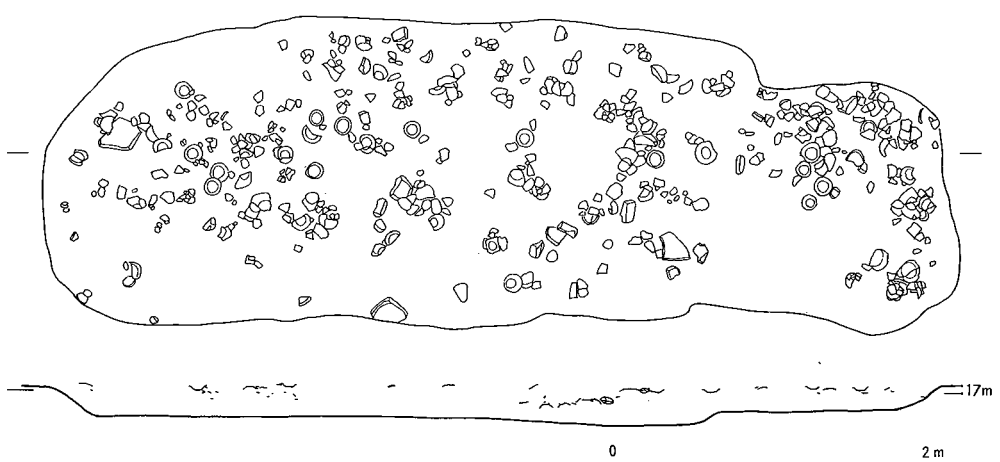
共に底部は欠損しているが、大きい方は外面、横方向のヘラ磨きがされており内面には放射線状の暗文がみられ、口縁端部は内側に傾斜し、そこにわずかな凹みがみられる。

次に土坑からは、口径13㎝、高さ4㎝前後の高台を有する椀と、口径10㎝余、高さ2.5～3㎝のわずかに丸味をおびた平らな底部と、外反する短い口縁部からなり内外面を横ナデしている坏、口径11㎝、高さ1.5㎝の口縁部のみ横ナデしている皿とがみられる。坏・皿ともに口縁端部内側に凹みをもつものともたないもの、口縁部が内弯気味のものと外反するものとにわかれる。

黒色土器椀A類は口径15～16㎝、高さ5.5㎝余のものと、口径18㎝、高さ6㎝のものがみられ、B類は口径12㎝、高さ4㎝の口縁端部内側に凹みをもつものが1点出土している。これらの土師器（坏・椀・皿）、黒色土器椀は包含層からもみられる。

縁釉陶器　口径17㎝、現存高　5㎝を測り濃緑色の釉を施しているものと、細片ではあるが、線描きしているものもある。

以上土坑出土の遺物は、完形に近い多量の土師器特に食器類が少量の須恵器と縁釉陶器を伴って出土した。各器形の組合せやその数量的関係などで興味ある事実を示す資料と予想される。



挿図6　遺構実測図

4　おわりに

加治・神前・畠中遺跡は、上述してきたように、近木川下流右岸、低位段丘上に位置し、既応の調査により、弥生、古墳時代の溝①、平安時代の建物跡②が検出されており、縄文～中世にいたるいろんな遺物が出土している。

今回の調査により、奈良時代の掘立柱建物1棟、平安時代の土坑（土器溜り）とともに奈良時代と思われる瓦、土坑より平安時代のほぼ完形と思われる土器150点余が、緑釉陶器、鉄器と共に出土している。掘立柱建物は、3間（6m）×2間（3.6m）の南北棟（やや東にふる）で、方形に近い掘り方を呈し、建物面積は21.6㎡である。

又、奈良時代の軒丸瓦が1点出土しており、近くにコギドと呼ばれる小字名も残り、「吉記」「明月記」等にも堂の存在が記載されており、近義郷および近木庄における中心的寺院の存在が、クローズアップされる。

土坑（土器溜り）からは150点余の土器が出土したが、須恵器の出土量は極わずかで、土師器が圧倒的に多く、黒色土器もみられる。土師器は、坏、皿が多く椀もみられるが甕は限られている。現在、整理中であるため、詳細は今後何らかの方法で報告できるものと考えている。

註①大阪文化財センター「貝塚中央線建設予定地内試掘調査報告書」1976

註②大阪府教育委員会、貝塚中央線建設予定地内調査（1978）による（広瀬和雄氏より御教示）

貝塚市内においても開発という行為があちこちにおいて進められつつある。その行為は家を建て道をつければよいというものではあるまい。それは遺跡の調査をすればそれでおわりというものでないのと同じである。開発対文化財保護といわれてきたが、生活環境を高めていく為にもお互い協力して同じ方向へ進まねばならない。

担当者の未熟なため、調査等いろいろ問題点もあると思うが、御批判、御指導をあおぎ今後の指標としていきたい。

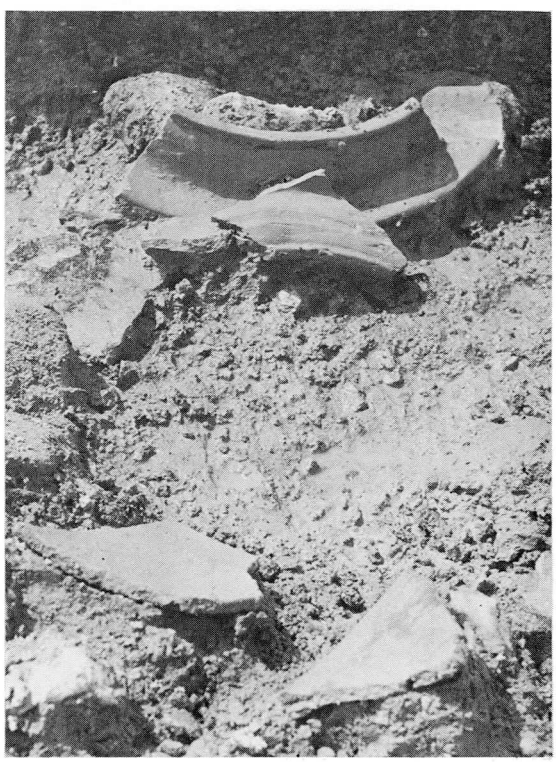
図　　版

図版第一　遺跡周辺航空写真

遠景（北より）

全景（西より）

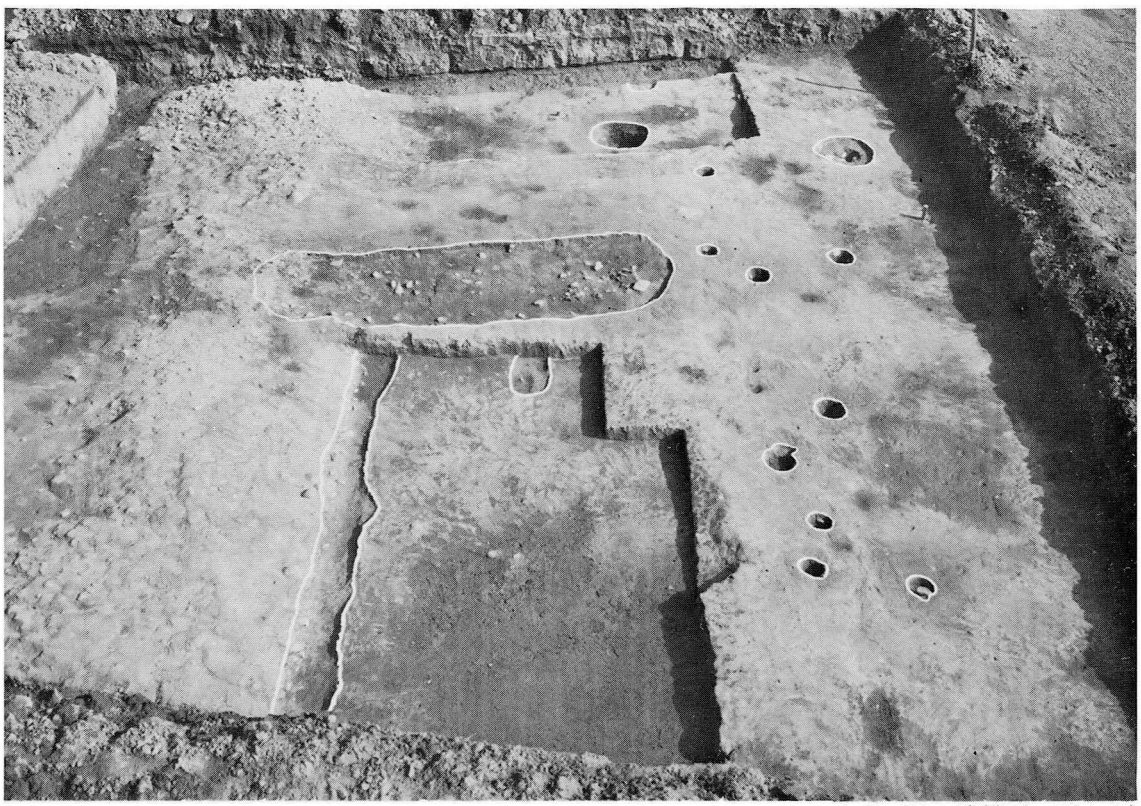
井戸1,2（北より）



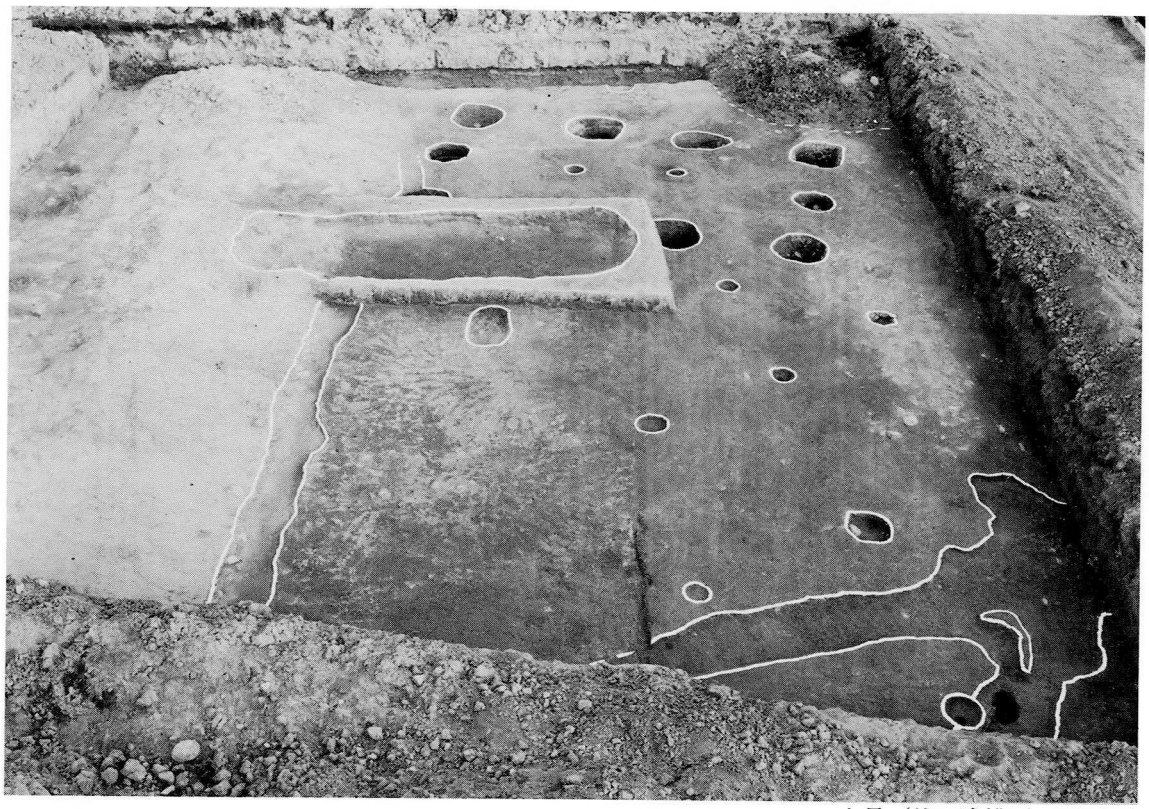
落ち込み2,遺物出土状況

図版第四　加治・神前・畠中遺跡遠景・遺構写真

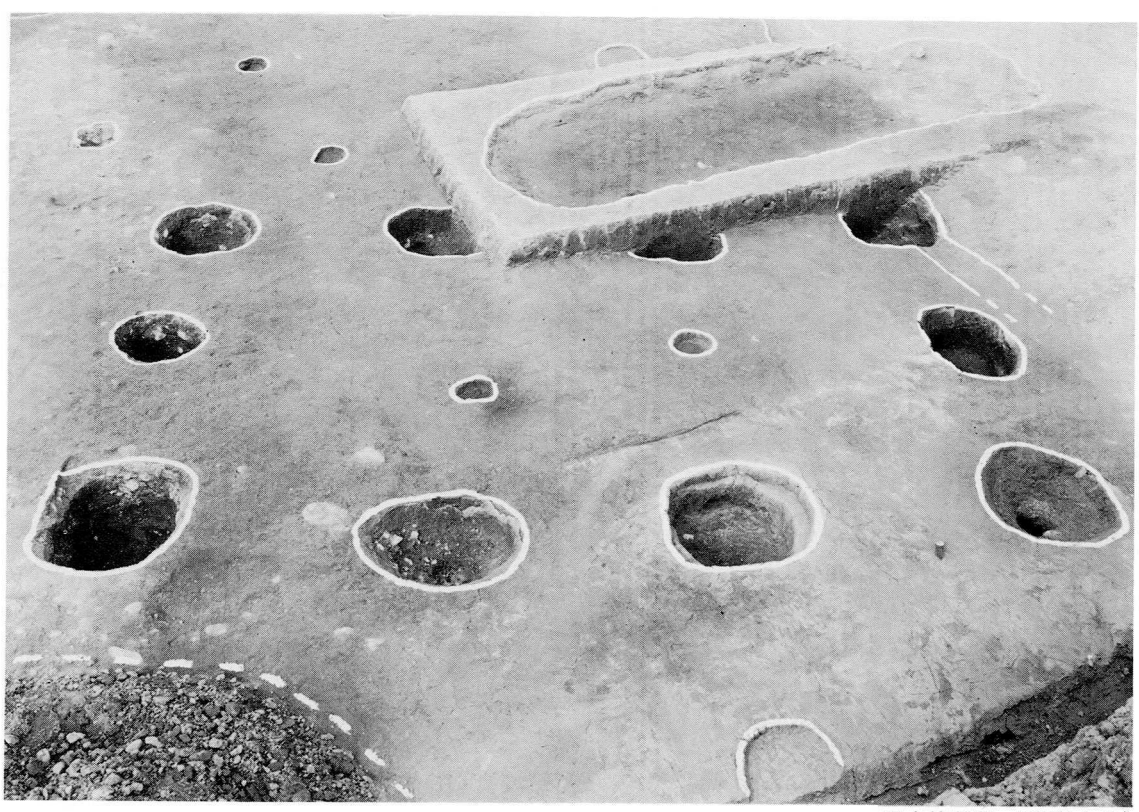
遠景（東より）



全景（第１遺構面，西より）

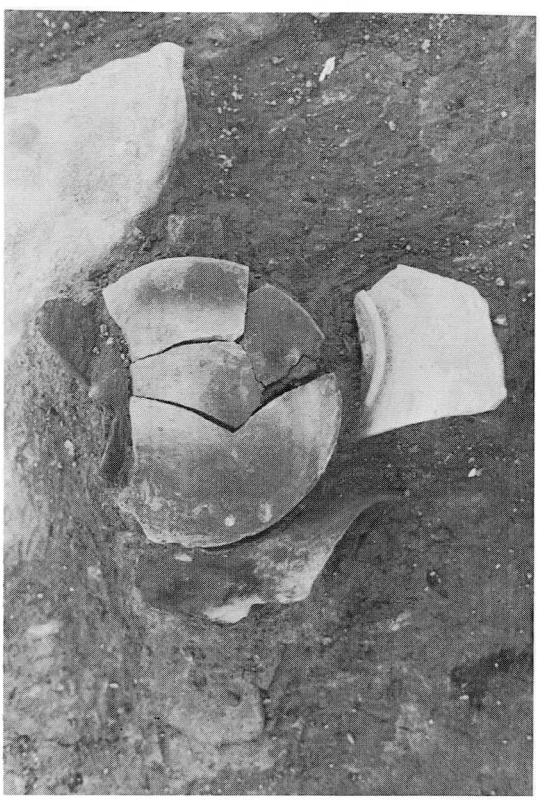


全景（第２遺構面，西より）

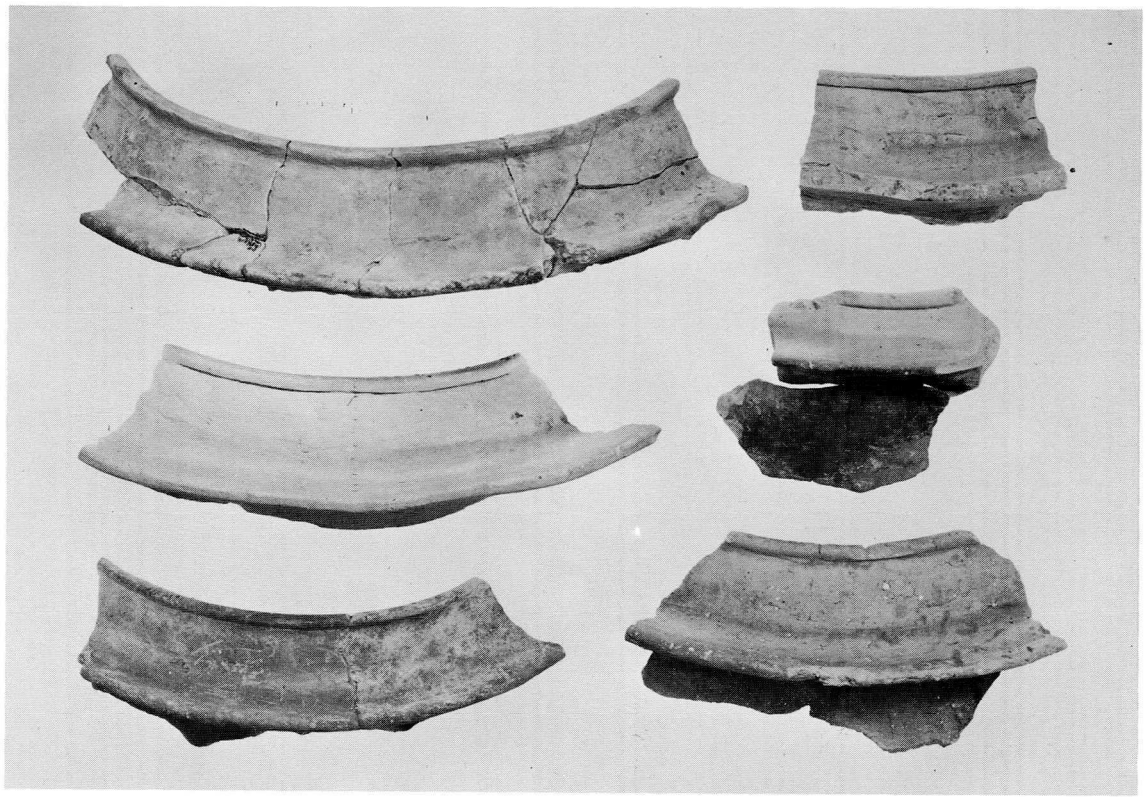


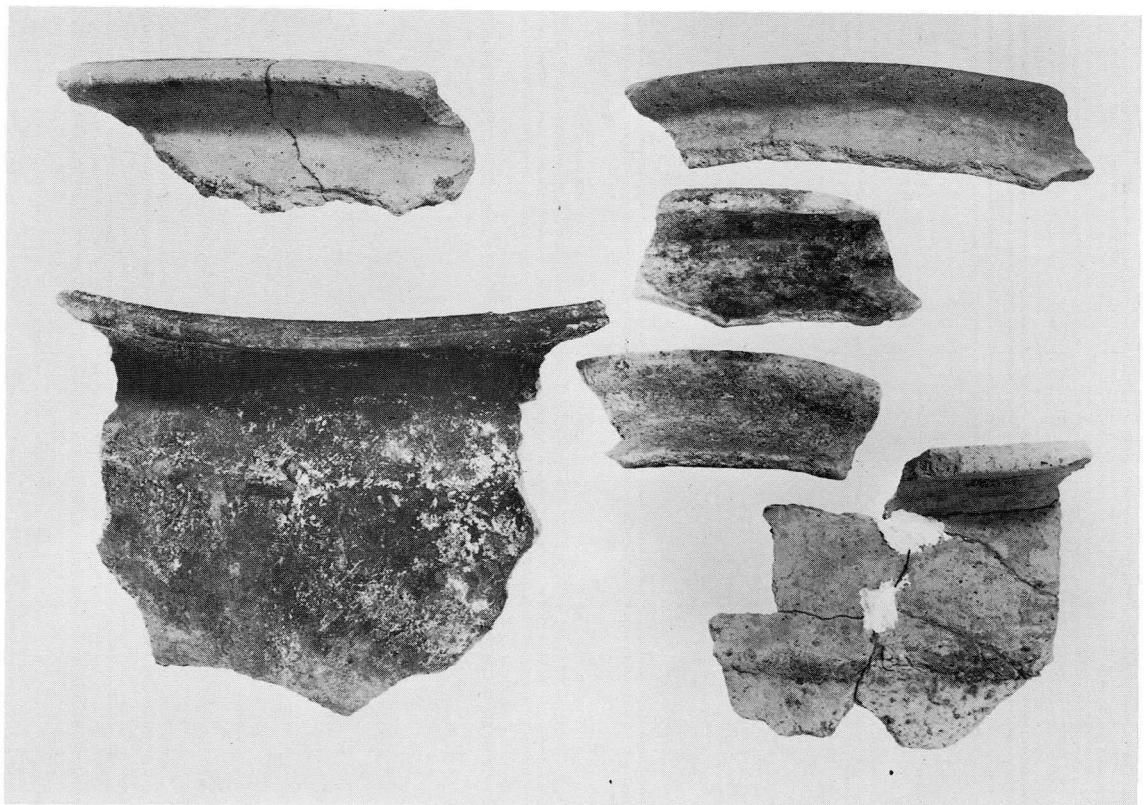
掘立柱建物（南東より）

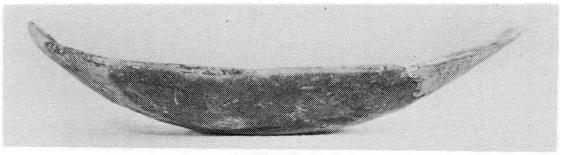
土坑（南より）

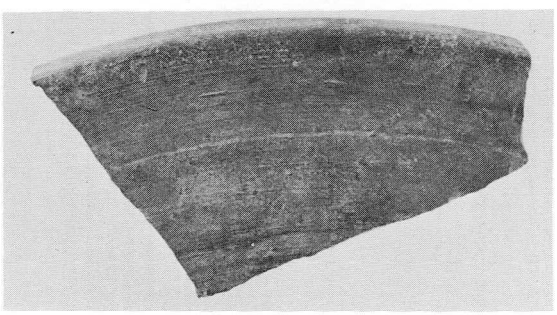


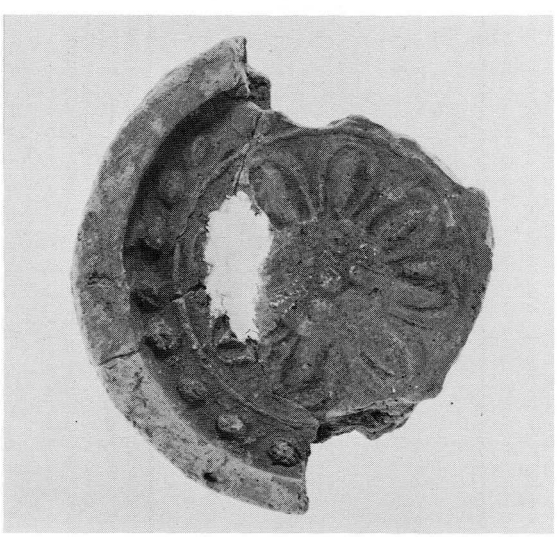
土坑遺物出土状況

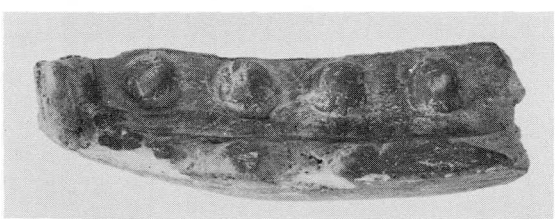


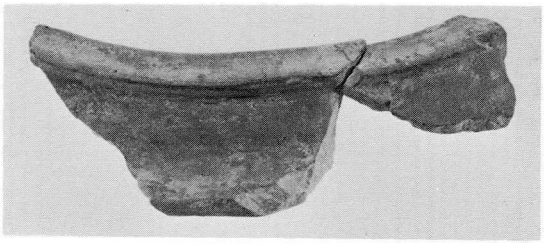


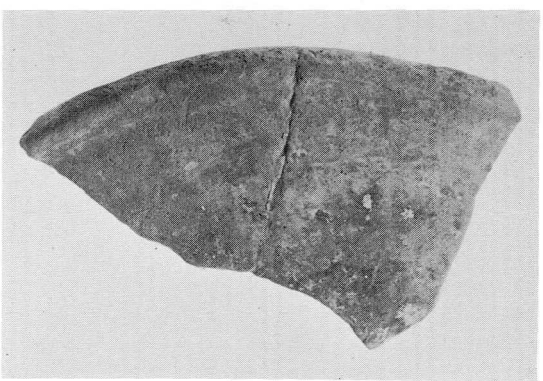


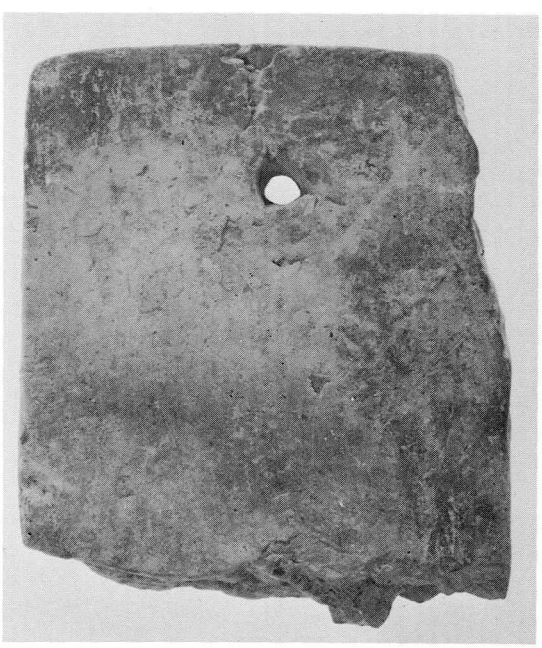


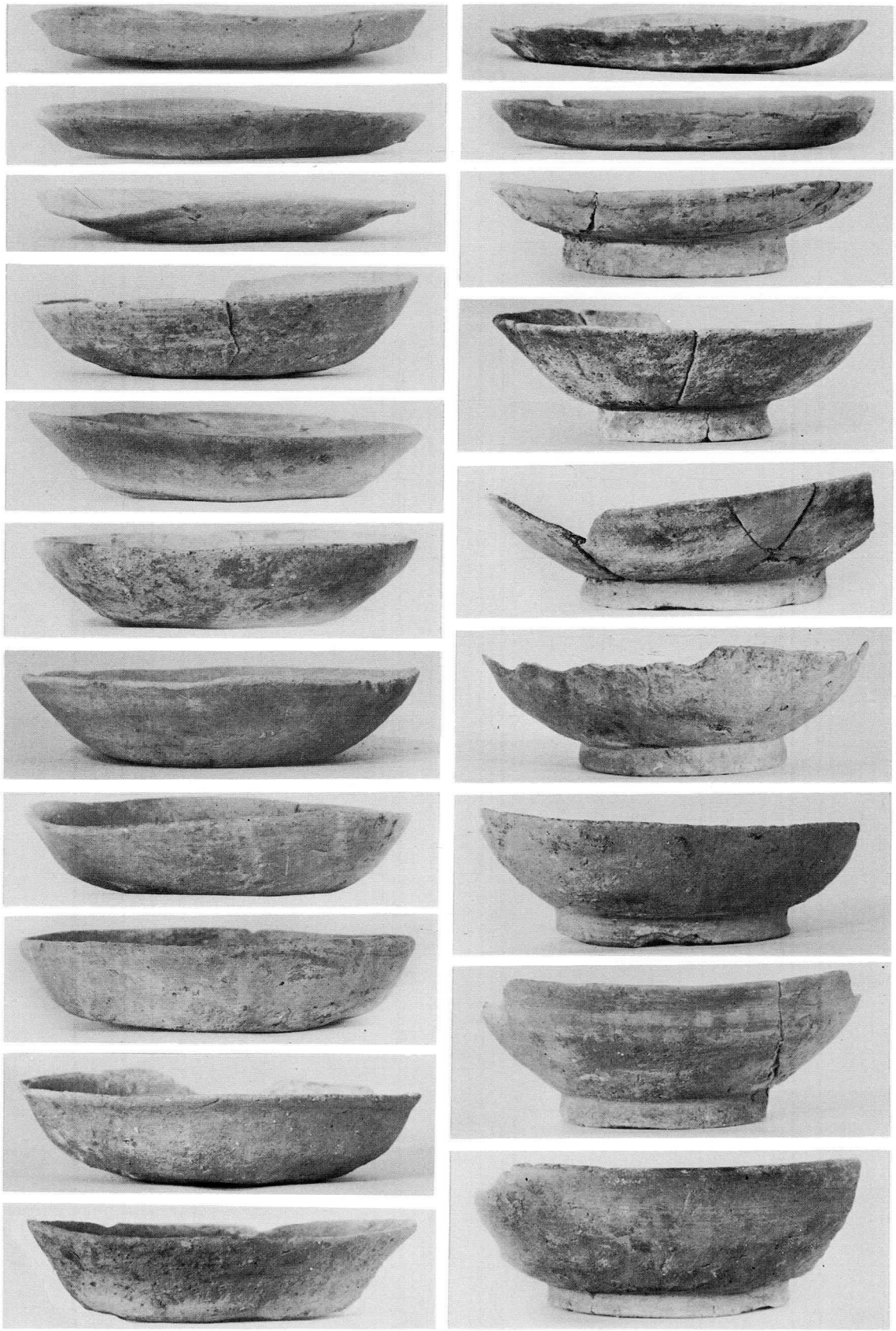


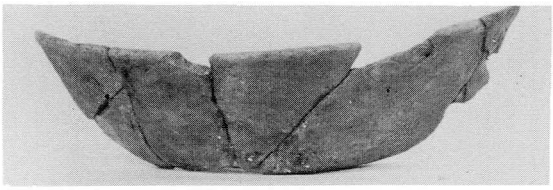
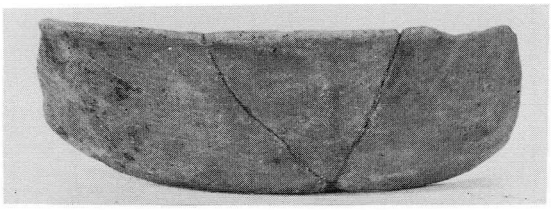
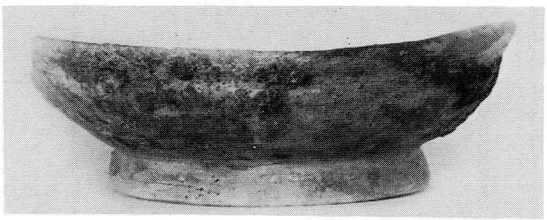
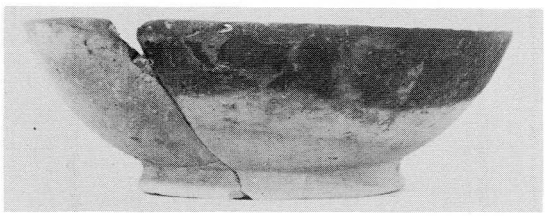
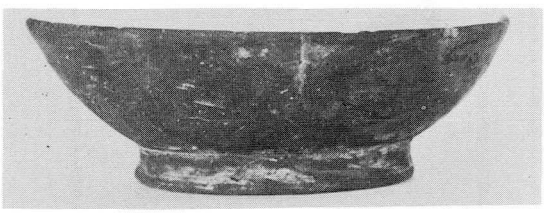
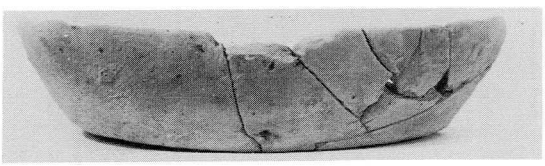
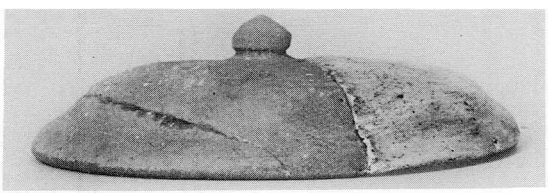
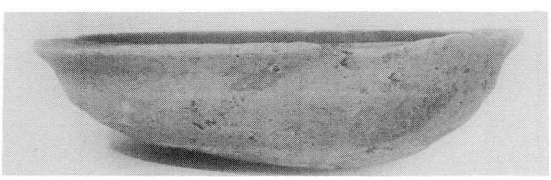
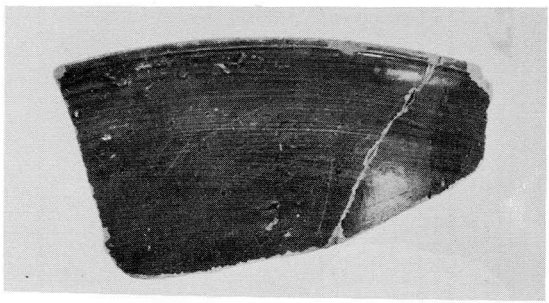
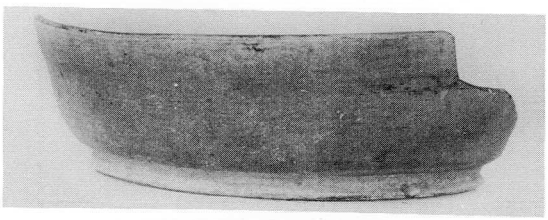
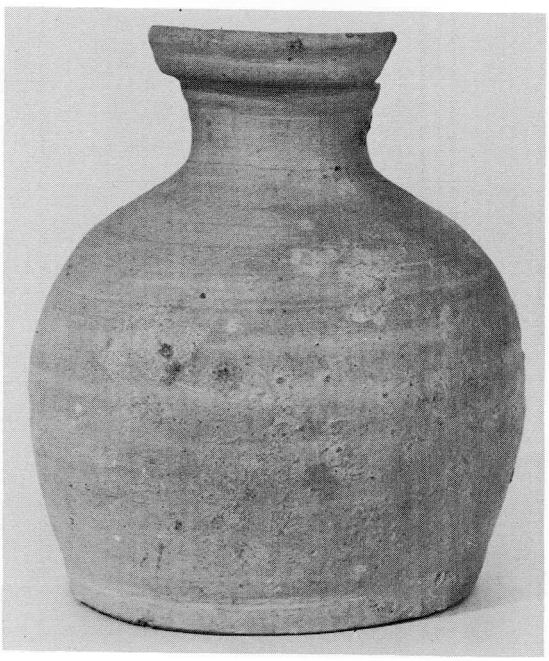
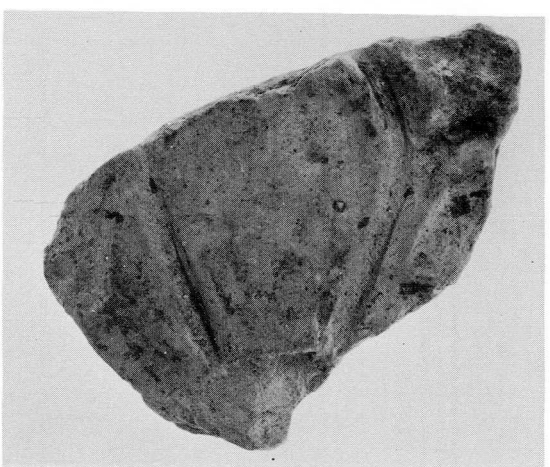








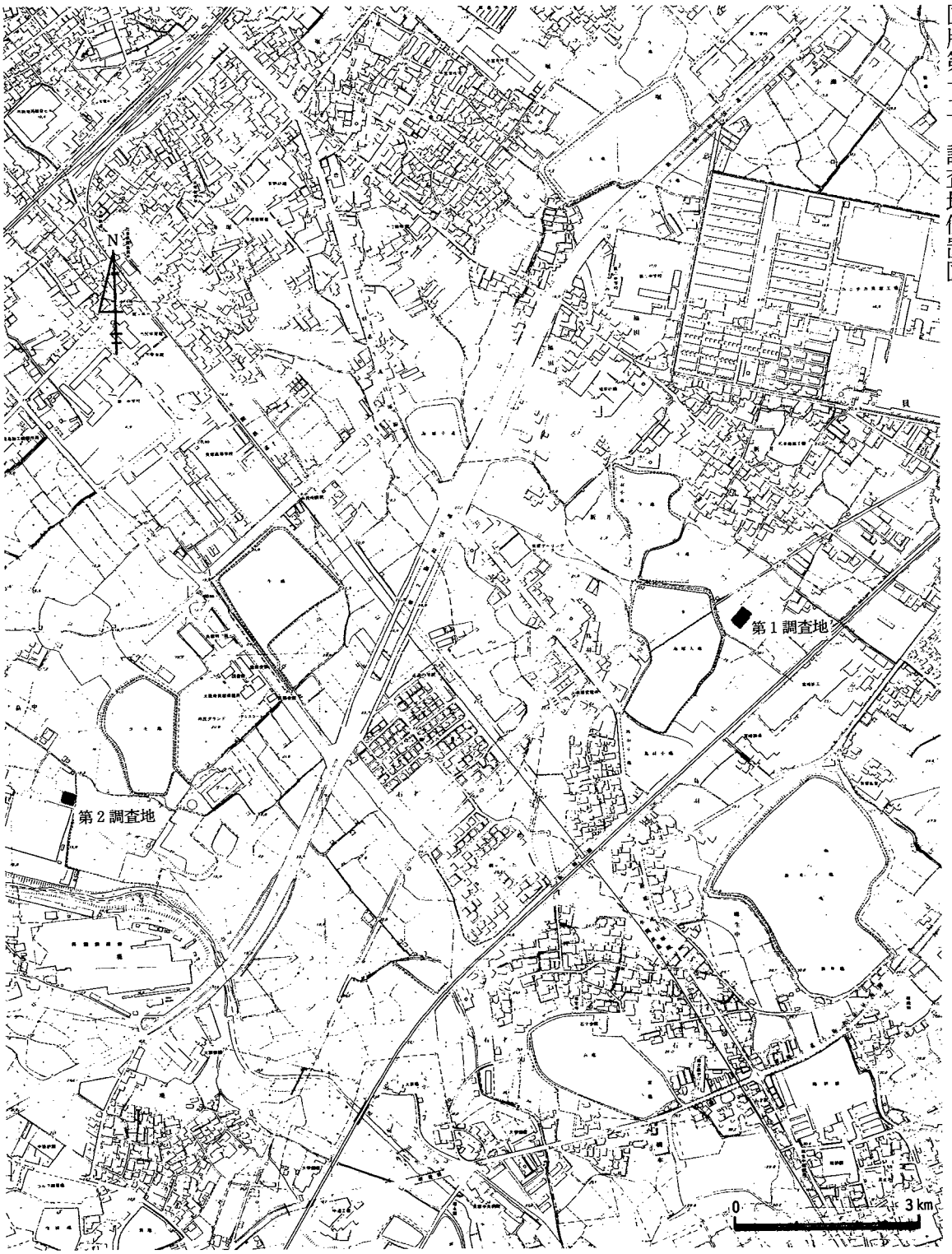


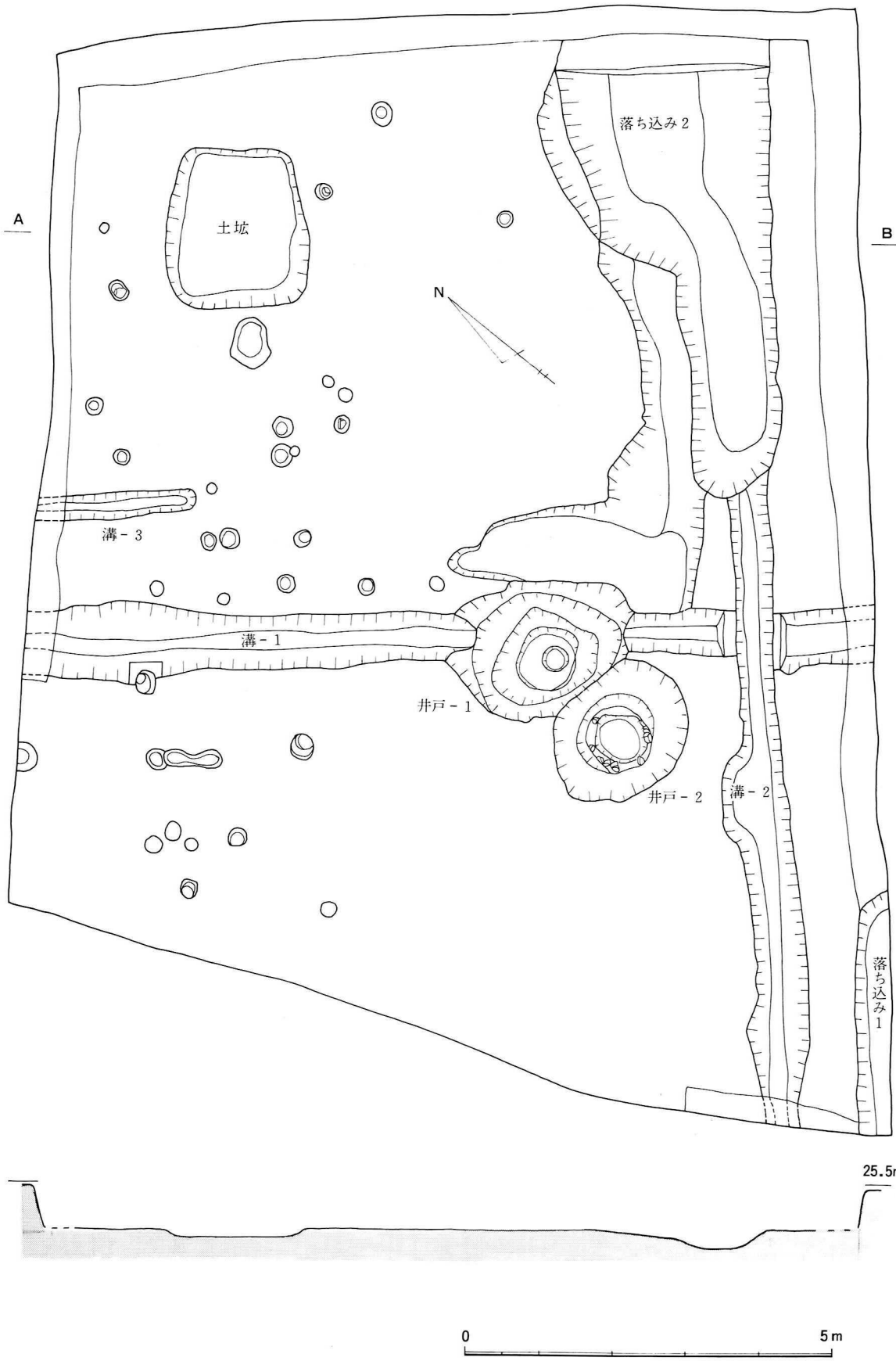
図版第十一　遺跡分布図

1 新井・鳥羽遺跡
2 加治・神前・畠中遺跡
3 加治・神前遺跡
4 長楽寺跡
5 沢城跡
6 渡池遺跡
7 窪田遺跡
8 丸山古墳
9 地蔵堂廃寺跡
10 下新出遺跡
11 積善寺城跡
12 橋本遺跡
13 新井ノ池遺跡
14 麻生中遺跡
15 泰廃寺跡
16 半田一里塚
17 半田遺跡
18 海岸寺山墳墓遺跡
19 海岸寺山須恵器窯跡
20 海岸寺山古墳
21 海岸寺山南須恵器窯跡群
22 清児遺跡
23 麻生中新池遺跡
24 堀遺跡
25 泉州麻生塩壺出土地
26 貝塚寺内町

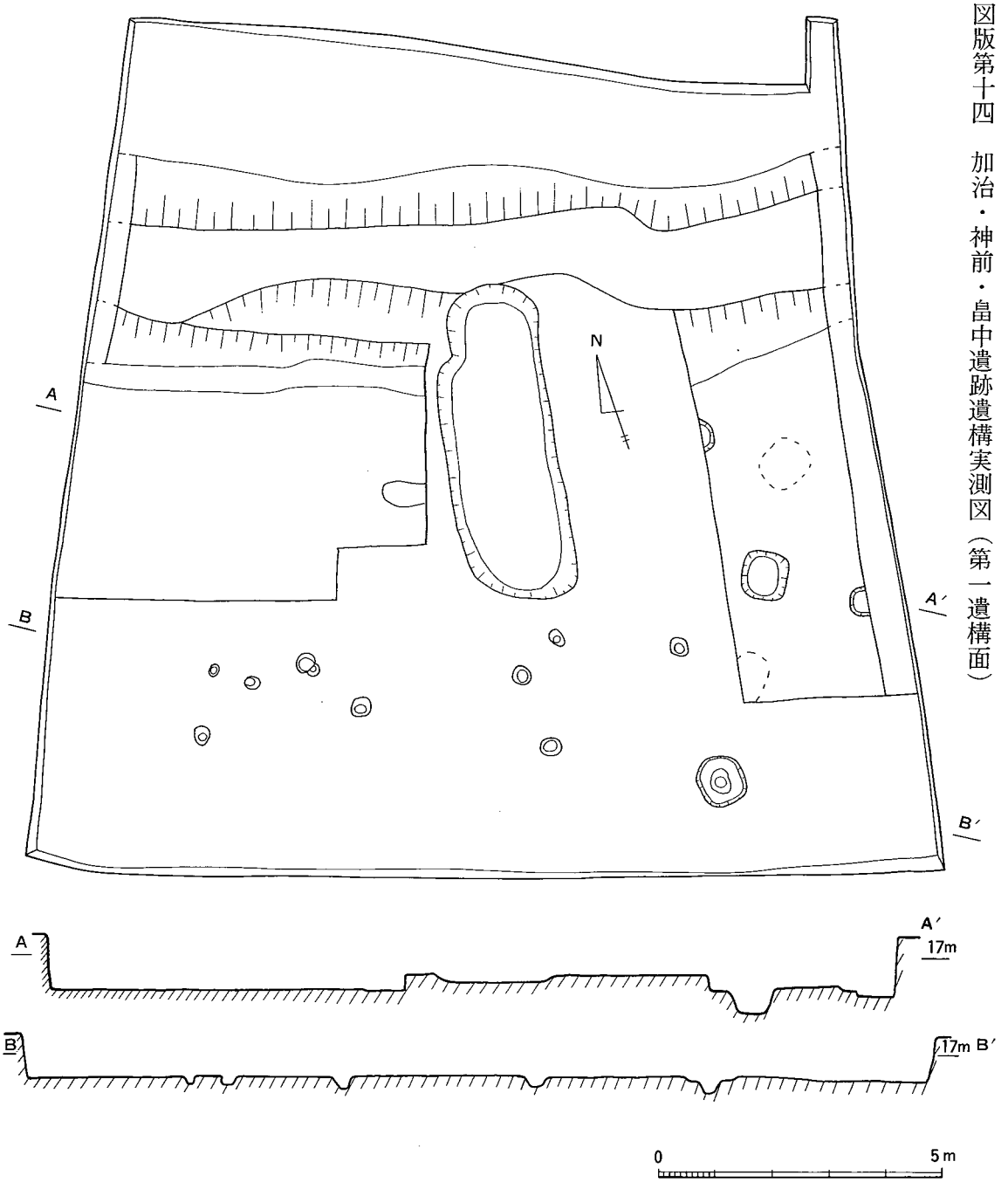
図版第十二　調査地位置図



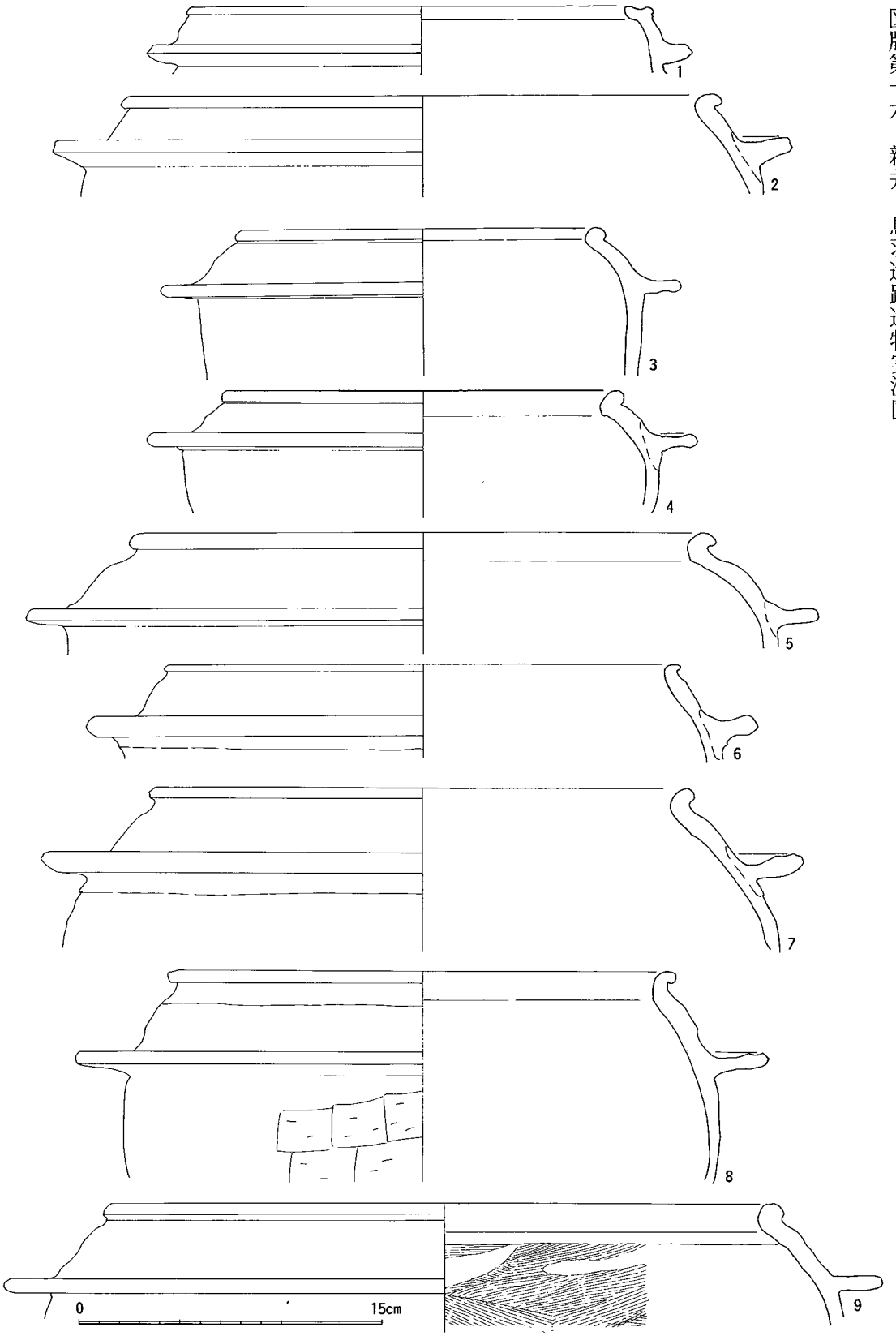
図版第十三　新井・鳥羽遺跡　遺構実測図



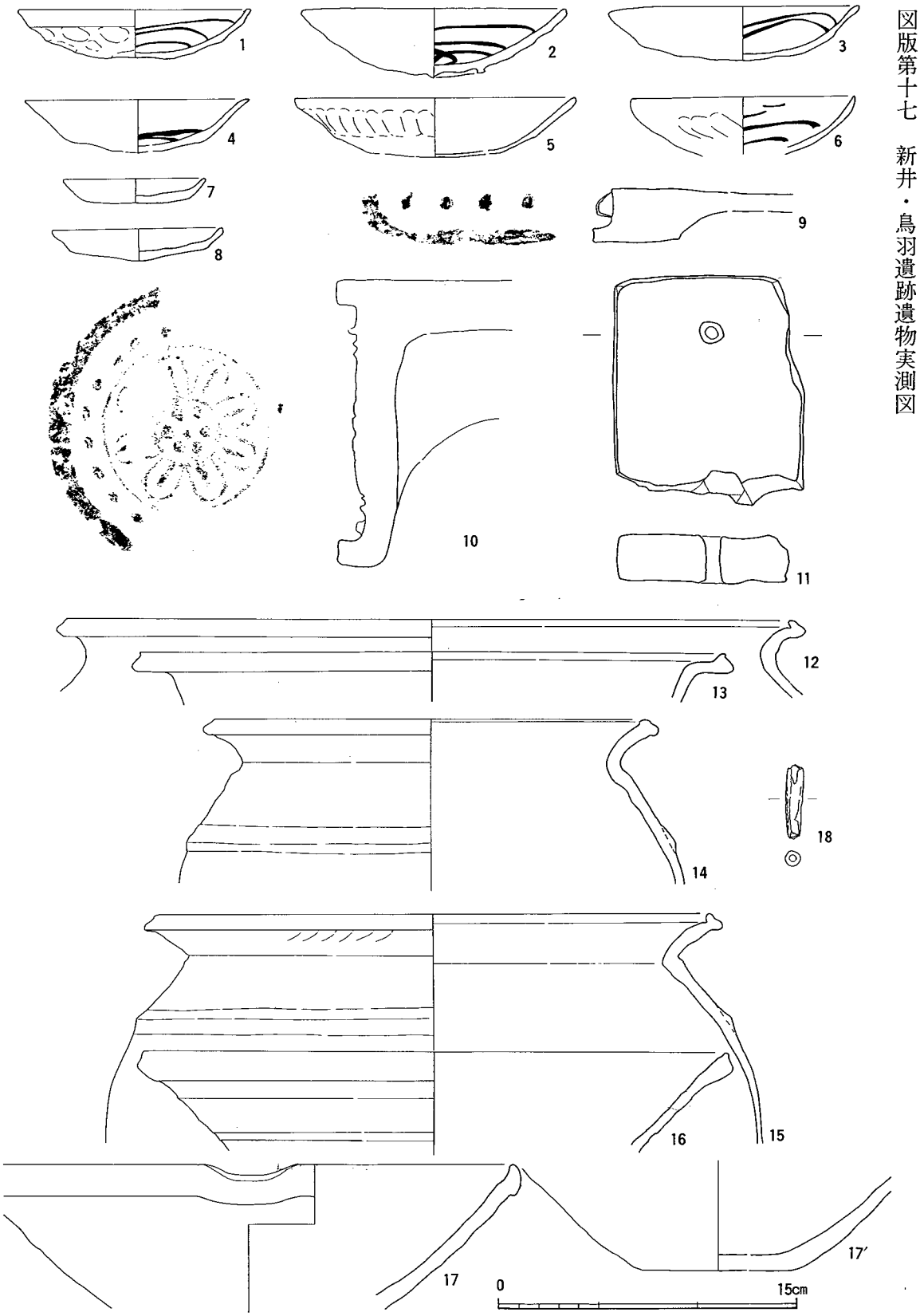
図版第十四　加治・神前・畠中遺跡遺構実測図（第一遺構面）



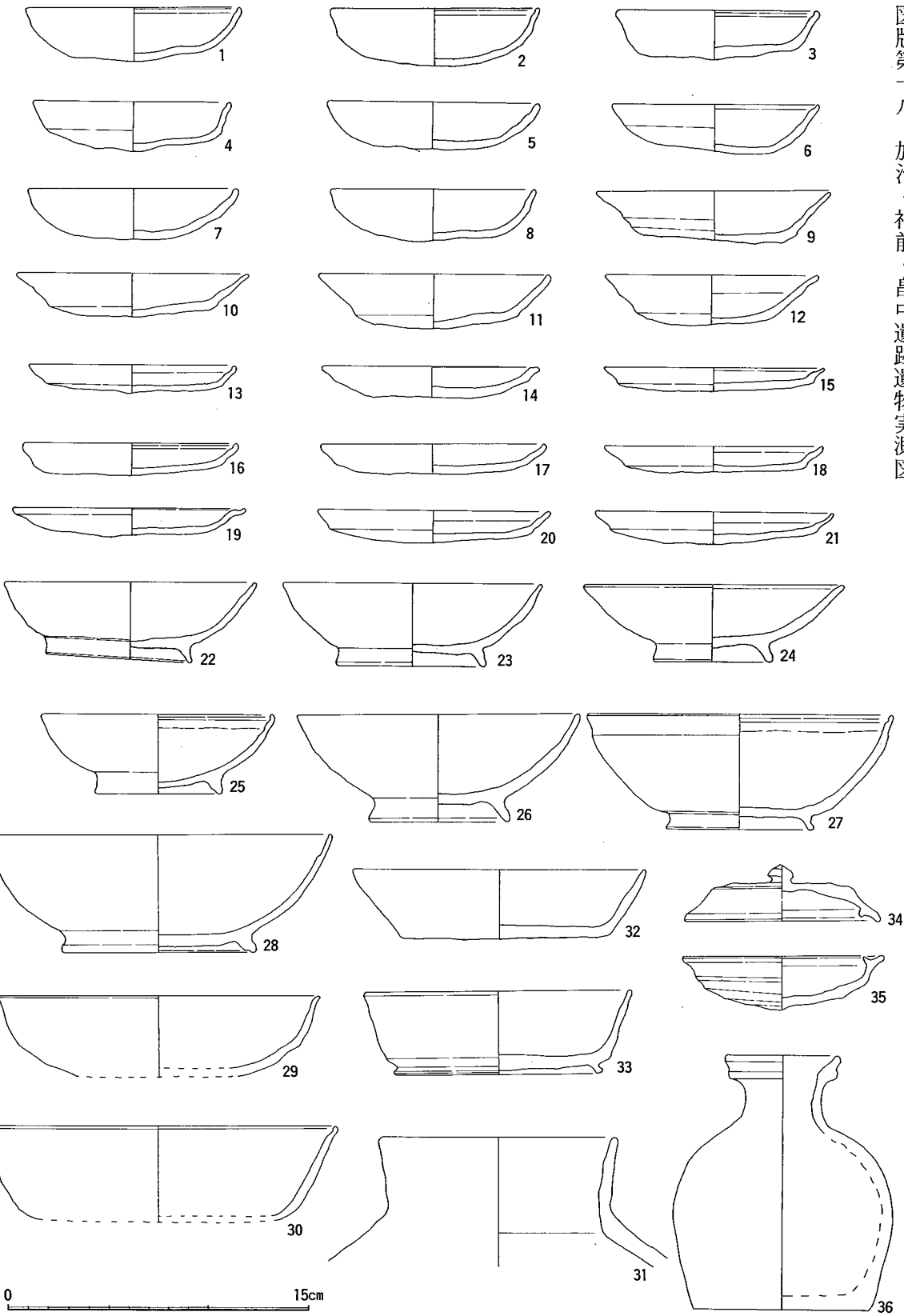
図版第十五　加治・神前・畠中遺跡　遺構実測図（第二遺構面）



1,2 瓦質土器　3～9 土師質土器



1～6　瓦器　7,8,12～15,17,18，土師質土器　16，須恵質土器　9～11，瓦



土師器（土壙１～24　包含層29～32）　黒色土器（土壙25～28）　須恵器（溝2,34,35,表採33,36）